

身近なオモシロ仮名

高城 弘一（竹苞）

はじめに

私たちの日常生活には、いろいろな文字が氾濫しています。日本語の表記としては、主として漢字・ひらがな・カタカナの三種類ですね。いうまでもありませんが、タイトルの「身近」「仮名」は漢字、「な」はひらがな、「オモシロ」はカタカナです。実はその他に、漢字の草書のような、面白い形をした一字一音の文字に出くわしたことはありませんか。これも広い意味での仮名なのです。今日使っているひらがなにに対して、これを「変体仮名」といっています。このような仮名は、平安時代に生まれ、その後途絶えることなく、連綿と使用されてきました。

また、楷書・行書で書かれ、漢字のように見えて、実は一字一音式に当て字のようにしているものもあります。これも広い意味での仮名で、「真仮名（まがな）」などといっています。本稿では、「変体仮名」と「真仮名」をひっくるめて、「オモシロ仮名」とします。

私たちの祖先は、言葉はあつたのですが、それを表記する方法がなかったのです。奈良時代に、漢字という外国から入ってきた字を用いて、日本語すなわち「やまとことば」を表記する試みが、長い年月をかけて開発されてきました。漢字を用いて日本語を表記する方法は、『万葉集』の多くに最も典型的に現れているので、「万葉仮名（まんようがな）」と呼ばれます。奈良時代の遺例に見られる万葉仮名は、漢字の書体でいう楷書や行書で書かれています。この表記法を後世、「真の手（しんの手）」「真仮名（まがな）」「男手（をのこで）」「男仮名」などと呼んでいます。この「真」は、真の字すなわち「真名（まな）」（漢字）の「真」というよりは、「真草千字文」の書体を表す「真」に近い意味だと考えてよいでしょう。一音につき数字存在します。中には、「し」のように一音につき、数十字にもおよぶものもあります。

ここで、平安時代に書かれた『万葉集』の一例を見てみましょう。

これは、額田王（ぬかたのおおきみ）の有名な歌です。平安中期、十一世紀後半に書写されたと推測される「元暦校本万葉集」から引用しました。「元暦校本万葉集」は、元暦年間（一一八四年四月十六日～一一八五年八月十四日）に、書写本『万葉集』に校合（きようごう）が行われたので、そのような名前が付けられています。五・七・五・七・七でわかりやすく区切ってみると、「あかねさす・むらさきのゆき・しめのゆき・のもりはみずや・きみがそでふる」と併記しています。

「茜草」で「あかね」で、品詞は名詞です。「指」は「さす」という動詞として使用しているので、「す」を補います。「武良前野」は「紫野」なので、「武良」が「むら」ということで一字一音式の仮名です。「逝」「行」は双方とも「ゆく」という動詞の連用形として使用しているので、「き」を補います。「標野」は地名なので、固有名詞です。「野守」「君」「袖」は一般名詞です。「者」は助詞の「は」として用います。漢文の訓読でもよく出てくるものです。漢文といえ、ここは「不見・哉」は「みず・や」と下から上に返って読んでいます。「之」は本来助詞「の」でしようが、同じ意味合いの助詞「が」にしています。「布流」は「ふる」です。動詞の「振る」という意味ですが、一字一音式の仮名です。後ほど詳しく述べますが、仮名というものは、その仮名のもとになった漢字の意味を捨て去るものです。しかし、ここでは「袖振る」ということで、「布が流れる」とたいへんうまい字を当てていませんか。

平安時代初期頃から、漢字の草書を用いて「万葉仮名」を書くことが流行りました。これを「草の手（そうのて）」「草の仮名」「草仮名（そうがな）」「草（そう）」「さう（そう）」などと呼んでいます。こちらも、一音につき数字存在します。九世紀の終わり頃までには、「草の手」をさらに簡略化した「平仮名（ひらがな）」ができたようです。「ひらがな」とは字形が平ら、すなわち扁平というのではなく、「平易な仮名」という意味合いです。この仮名は、「女手（をんなで）」「かなな」「かな」などと呼ばれます。

「仮名」は、正式には「假名」と書きます。「假」は意味としては「借」で、漢字（真の文字すなわち、真名）から、借りてきたということでしょう。「かりな」↓「かなな」↓「かな」という、音の変化によって、「かな」という言葉が定着したようです。

その他の仮名では、絵画化されたり意匠化されたりする仮名の「葦手（あしで）」や主として万葉仮名の一部を採った仮名のカタカナ（片仮名）などがあります。

「平易な仮名」という意味合いの「ひらがな」という呼び方は、室町時代以後からのようです。平安時代には、「女手」と呼んでいたらしいのです。ここでいう「ひらがな」というのは、今日私たちが認識する「ひらがな」とは、少々性質が異なります。

女手という仮名は、今日いうところの「変体仮名」の一部と「ひらがな」によって構成されています。したがって、一音につき数字存在します。例えば、ひらがな「あ」のもとの漢字は、「安」です。「安」は、ひらがな「あ」の字母(じぼ)といえます。変体仮名「あ」ではその字母を示すと、「安」「愛」「悪」「阿」などが知られているかと思えます。これらの仮名は、平安時代より連綿として使用されてきました。そして、今日私たちがひらがなと認識する仮名は、変体仮名と区別するために、明治三十三年(一九〇〇)の「小学校令施行規則」の第十六条によって、一音につき一字、すなわち四十七字(「ん」を含めて四十八字)に統一されたということになっています。

ここでは詳しく述べられませんが、実際には、もっと古く南北朝時代の尊円親王(一二九八―一三五六)によって、今日私たちがひらがなと認識する仮名が制定されたという自説を持っています。その頃から、手習いとしてのお手本的な「いろは歌」は、「そ」・「え」・「お」以外、すべて今日のひらがなとびたりと一致します。

「そ」・「お」も字母は今のひらがなと一致します。形が少々異なるだけです。「え」の字母は「衣」ですが、ここでは「江」を使っています。これに関しては、形はもちろん、それに伴う字母もまったく違うのです。

漢字というのは、形・音・義という三つの要素を備えています。私たちは直感的に、「形」(姿)を見ただけで、「義」(意味)も思い浮かべるかと思えます。漢字は「義」を持つということが重要で、特に「表意文字」といっています。

たとえば、「悪」という漢字は、どう考えたってマイナス的なイメージです。十数年前に、出生したわが子の名前に、実の親が「悪魔」と名付けるということが話題になりました。結局、役所ではそれを受理したとかしなかったとか。当時の法務大臣まで巻き込んで、訴訟騒ぎになった例の一件です。これは「悪魔」という言葉で、悪と魔という個々の漢字はもとより、それを組み合わせた熟語の意味にも問題があります。その親は「悪魔」がいけないのなら、「阿久魔」とも考えていたとのことですが、これは問題の挿げ替えです。

仮名というのは、漢字の「形」はそのままだに借用し(○)、「音」は全部もしくは一部(いずれも一音のみ)を借用し(△)、「義」すなわち漢字の持っている意味は借用せずにすべてを捨て去って(×)、単なる符号として使用するものです。仮名は漢字の持っている「義」を捨て去り、一音の符号として用いるので、特に「表音文字」といっています。

このように、漢字の「表意文字」と仮名の「表音文字」は、まったく性質を異にすることをお分かりいただけましたか。

前置きが少々長くなりましたが、オモシロ仮名に戻しましょう。

今日でも、お店の看板や暖簾・旗・提灯などのディスプレイ、お菓子などの名前が入った紙片や包装紙、箸袋ほか、案外とたくさんものものに、これらオモシロ仮名が使用されています。主として、明治時代以前の遺品としての道標や石碑など、身近なところでもこのオモシロ仮名に出合うことができるかもしれません。つつい何気なく見過ごしてしまっているかもしれませんが、そこには、オモシロ仮名が完成した平安時代からの伝統が受け継がれているのです。

平安時代のもものという、身近なものでは二千円札の裏面に、まさに王朝期の仮名で、本格派なオモシロ仮名と出合うことができます。さて、どのようなものであるか、思い出せますでしょうか。

オモシロ仮名というと、伝統ある古くからの街や下町などで数多く使用されているような印象があります。そこで、浅草ならばこのオモシロ仮名が豊富に使用されているのではないかと推測し、今回は浅草界隈に注目しました。今年の夏と秋に何度となく浅草を散策し、オモシロ仮名の発掘、収集に努めました。

皆様と一緒に、浅草を散歩して、このオモシロ仮名を見つけ、解読していこうではありませんか。また、オモシロ仮名が使用された背景やその魅力も、併せて紹介できたらと思います。

一. そば処／雷門満留賀

雷門の大きな提灯と山門は、たくさんのおモシロ仮名が潜んでいる浅草界隈への、まるで玄関口のようなのです。そこから浅草寺まで続く商店街が、有名な仲見世です。それと並行して、隅田川寄りに観音通りがあります。この観音通りにですが、雷門通りからほど近いところに「そば 雷門満留賀」(写真①) があるので、看板の「雷門満留賀」は、あたかも漢字の楷書のようです。

〔写真①〕



雷門満留賀のホームページ上「満留賀の歴史」によると、以下のとおりになっています。

創建以来千三百七十余年の歴史ある金龍山浅草寺（浅草観音様）のお膝元で、弊社は明治中期に創業して以来、厳選した蕎麦粉を使い、伝統の江戸風味を大切にこの道をひたすらに百年が過ぎました。（中略）

この地を訪れて下さる多くの人々から四季それぞれの下町情緒が漂うと云われる雷門界限。ぜひ本店で折々の味をご賞味下さいませ。

尚、お客様から蕎麦のお持ち帰りのお声もいただきますので、当店特製の「そば味噌」と共にお土産としてご案内申し上げます。四代目 敬白

(<http://www.maruka.net/ja/>)

実は、中略の部分に、たいへん奥深いことが書かれていますが、全体を通して、ただ私の知りたい肝心のことがありません。今までに、都内で何店かの「満留賀」という屋号のおそば屋さんを見かけたことがあります。それに比べるとここでは「雷門」が冠してあり、何か特別なものを感じます。そこで思い切って、雷門満留賀のホームページからメールをして、問い合わせを試みることにしました。質問事項の要点は、次の二つです。

その一 お店は「かみなりもんまるか」とお読みすれば良いのですか？

その二 「満留賀」という屋号の由来は何ですか？

これに対して、お店から丁寧な回答がありました。

高城弘一様

このたびはお問い合わせありがとうございます。

さて、ご質問ですが、まず読み方は高城様のおっしゃる通りでございます。

「満留賀」という屋号が、暖簾分けで増えていった結果、現在首都圏に二百店舗ほどの満留賀が存在します。そのなかであえて差別化するため「雷門」をつけて屋号とした次第です。

二つ目のご質問ですが、明治の初期に創業した、弊店の本店の初代が加藤という者で、加の字を丸で囲んで「まる加」としたのが、満留賀の始まりでございます。弊店の初代はその加藤の下で修業し、明治二十八年十月に独立創業いたしました。その後弊社や本店を含めた同じ暖簾が集まり、満留賀という当て字をいたしました。

以上を弊店の屋号に関するご質問に対する返答とさせていただきますが、ご納得いただけましたでしょうか。今後もよろしく願います。

そば処 浅草 雷門満留賀

これで、疑問が氷解しました。「満留賀」は「まるか」と読むこと、「満留賀」はそもそも「〇加」という意味だということですが。

漢字には、個々に意味があります。当然、形や音もあります。そもそも仮名は、この漢字の形はそっくり借りて、音は一音のみを借りて、意味はまったく借りずに捨て去るといったものでした。

わが国で、漢字の音読みには、漢音・呉音・唐音・宋音があります。例えば、「行」の音読みですが、漢音では「コウ（カウ）」、呉音では「ギョウ（ギヤウ）」、唐音では「アン」です。それぞれの括弧内は、歴史的仮名遣いの表記です。呉音とは、古く中国の南方系の音で、仏教関係の音として知られています。一方、奈良時代や平安時代初期には、唐代の標準的な音を写しました。これが漢音です。当時の役人や学者は、この漢音を用いています。唐音とは、中国の宋・元・明・清代の中国音を伝えたものの総称です。その中でも、宋音は唐代末から元代初にかけての音、すなわち鎌倉時代に伝わった音をいうようです。

「行」を用いた代表的な熟語を挙げてみましょう。漢音では「行動」|| 「コウドウ（カウドウ）」、呉音では「行者」|| 「ギョウジャ」または「ギョウザ（ギヤウジャ）または「ギヤウザ）」、唐音では「行灯」|| 「アンドン」です。漢音の「コウ（カウ）」や呉音の「ギョウ（ギヤウ）」はすぐに出てきますが、唐音の「アン」はなかなか出てこないかもしれません。

仮名は、呉音読みの一音が採用されていることが多いようです。「留」は留守の「ル」で、これは呉音です。これが仮名の音になり、ひらがな「る」の字母です。ちなみに、留年の「リュウ（リウ）」は漢音です。「留学生」を、「リュウガクセイ（リウガクセイ）」と発音すれば、これは漢音読みですし、「ルガクシヨウ（ルガクシヤウ）」と発音すれば、これは呉音読みになります。ついでに、「白衣」に関していえば、「ハクイ」|| 漢音、「ビヤクエ」|| 呉音です。ひらがな「え」の字母が、まさにこの「衣」です。

さて、「満留賀」に戻りましょう。「○加」すなわち「まるか」を当てるのに、別段「末流加」でもいいわけです。字形の見栄えというものにも大いに関係がありますが、「満留賀」とは実に見事な当て方です。「満留賀」は「満ちるのが留まり賀である」と解釈できます。気分的にも満ち足りて、おめでたい印象です。こちらで勝手に当てた「末流加」ですが、これですと「末に流れて加える」となり、蕎麦というよりは、麵は麵でも何だか流しそうめんを連想してしまいました。仮名は、もとの漢字の意味を捨て去ると述べました。しかし、屋号や商品名など、どうももとの漢字の意味に引きずられて、というよりはざりその意味を上手く踏まえて、良い意味を持つ漢字を組み合わせるということが少なからず散見されます。

他店の「満留賀」は、主に行書や草書で書かれています。それでも「まるか」と一字一音式に読むのですから、行書の場合は「真仮名」、草書の場合は広義の「変体仮名」ということになり、いずれも本稿で規定するオモシロ仮名ということになります。

雷門満留賀のショーウインドー内のお品書は、ところどころに変体仮名を交えてあり、たいへん興味深いものです。こちらについては、いずれの機会に改めて見ていきましょう。

二・つま(満)亀、つ(川)ま(満)亀

悠木昭宏氏のブログ「横浜・浅草物語」(<http://blog.clefmusic.net/>)は、実に面白いものです。なぜかといえますと、日常生活の中で、横浜と浅草のさり気ない姿が映し出されているからでしょう。一方では、港町・横浜と下町・浅草との対比のようでもあり、横浜の古色や浅草の新しさなど、イメージとは逆の姿が随所に紹介されている点も注目されます。

写真②の看板は、このブログの平成十八年七月六日付に、「つる亀」として紹介されています。悠木氏は、「この雰囲気何度見てもノスタルジック」と書かれているように、私も幼少の時にはごく当たり前に、よく見かけたような光景で、何だか心が安まります。

ただし、この看板を画面上で拝見した時に、これは「つる亀」ではなく、「つま(満)亀」ではないかと直感しました。しかし、不鮮明なところもあるので、実際にこの眼で確かめなければなりません。この「つま(満)亀」について、事前に住所・電話番号などを調べずに、闇雲に探索している時、写真③の看板に出会いました。すわ、探していたものではないか、と。しかし、何だか変です。記憶にある「つま(満)」の書風はもとより、後で撮影した画像と比べたら、「亀」の

【写真②】



【写真③】



書体がまったく違います。

写真②で「つ」は普通のひらがなですが、写真③では「つ」の変体仮名（字母は「川」）になっていて、これはひらがなになる前の形です。「亀」の書体ですが、写真②は行書、写真③は楷書です。また、悠木氏の紹介「つま（満）亀」（写真②）は、青で清酒、赤で白雪、黒で酒の店ともありました。どうも飲み屋さんのような感じです。今回出会った「つ（川）ま（満）亀」（写真③）は、黒で総合食品、赤で電話番号もあります。実際に店内をのぞいたら、八百屋さんのようでした。夏なのに、温室育ちで緑色の勝ったみかんを購入し、店員さんに屋号を伺うと、「つまかめ」ということが判明しました。ほど経ずして後日、悠木氏紹介の「つま（満）亀」（写真②）の看板にも出合いました。夕刻でしたが、すでに営業をしているようで、赤提灯には黒で「つま亀」「つま」はひらがな）と書かれてあり、字の周りが余白になっています。また、紫色の暖簾には「つまがめ」（すべてひらがな）と白く染め抜かれています。お店のご主人に確認するまでもなく、あの時の直感が誤りでないことをここに確認したのです。

今回の看板とは関係なく、一般的にもし「つ■亀」となれば、十人が十人、■に「る」を入れるでしょう。鶴と亀は、

古来一緒に登場することが少なくありません。「鶴は千年、亀は万年」ですし、七五三の千歳飴の紙袋には、おめでたいものとして双方とも不可欠な存在です。それは、長寿を祈る意味合いもあるのでしょう。「かごめかごめ」という童謡には、「鶴と亀がすべった」とありますね。小学生の時は、算数で「つるかめ算」というのもありました。頭は一つで、足の数がそれぞれ違うのがミソです。ゆとり教育といわれて久しい当世の小学生も、果たして「つるかめ算」という言葉を知っているのでしょうか。

幼少の頃から、自然と脳裏に染み込んできた鶴と亀のほんの一例ですが、このように鶴と亀のコンビは最強です。しかし、今回の看板は、残念ながら「つる亀」ではなく「つま(満)亀」です。変体仮名の「ま(満)」を、変体仮名「る(留)」と同じく「る(流)」と見誤ることは大いに考えられます。悠木氏の場合、暖簾が掛かっている宵の口にでも足を運んでいたならば、「つま亀」として紹介されていたのでしょうか。ちなみに、横浜には「つるかめランド」というスパーが点在しているらしく、ブログ「横浜・浅草物語」八月二十二日付でも紹介されています。

それでは、「つま亀」という屋号は何か意味があるのでしょうか。「つま亀」をYahoo!電話帳(全国)で検索すると、以下の四件がヒットしました。

有限会社つま亀(青果物卸・中央区)

つま亀(居酒屋・台東区)

つま亀商事株式会社(青果物店・台東区)

つま亀商事株式会社(青果物店・台東区)

いずれも都内に実在しているようです。二番目の「つま亀」は、どうも写真②のお店のようです。三番目と四番目の「つま亀」は、住所がほんの少し違うだけで、写真③のお店とみて良いでしょう。初めてお目にかかるのが、一番目の「つま亀」です。

一番目の「つま亀」は、調査の結果、東京都中央卸売市場・築地市場の場内にある「魚がし横丁」にあります。「つ(川)ま(満)亀」と立派な木の扁額に書かれています。

Yahoo!電話帳(青果物卸・中央区)で検索すると、一七八件の電話番号がヒットし、「つま」または「妻」の含まれているものが意外と多くあることに気がつきました。それは、有限会社つま亀・つま敬・有限会社妻定・有限会社つま竹・

株式会社つま長・株式会社東京伊豆妻です。つま敬と東京伊豆妻も築地にありますが、つま亀・妻定・つま竹・つま長は築地の魚がし横町に集中してあります。魚がし横町のホームページによると、つま(妻)と付く妻傳商店(1号店)(2号店)もあります(<http://www.ugashiyokocho.or.jp/top/top.htm>)。

それぞれの店舗のページを開くと、扱うジャンルが青果・妻物とありますが、果たして妻物とは何でしょうか。妻物とは、刺身や吸い物、料理などに添えて用いる野菜や海藻などのことです。いわゆる「刺身のツマ」のつま(妻)です。代表的なつま(妻)とは、ワサビ・オオバ・シソの実・シヨウガ・ミヨウガ・パセリなどですね。

これらの店舗は、料理屋や寿司屋などの飲食店で使用する、欠かすことのできない食材を取り扱っているのです。そのような専門店だからこそ、一瞥して判別できるように、屋号につま(妻)を付けているのでしょう。

別の調査によると、築地場外市場には「つま亀」という天ぷら屋さんがあったそうです。今では廃業し、店舗は存在しません。看板や暖簾などに、屋号「つま亀」がどのように書かれていたのでしょうか。まったく興味の尽きないところです。

浅草の「つま(満)亀」は、数多くの飲食店がある浅草にとって、不可欠な存在なのでしょう。ただし、「亀」の意味はいまだに不明です。

おわりに

平成十八年十月十四日に、大東文化大学板橋校舎において、いたばし文化芸術カレッジ第二弾・大東文化大学公開講座「文化芸術の東と西」第一回目「身近なオモシロ仮名」として講演をしました。本稿は、その際のごく一部を、その後詳細に文章化したものです。講演当日は、デパートの地下の食料品売場、いわゆるデパ地下の商品にもオモシロ仮名がたくさん見られることを報告し、実際にそれらの一部を陳列しました。やはり、夏と秋に、都内のデパ地下に何度となく足を運び、オモシロ仮名の発掘・収集に努めた成果です。来聴者の方には、興味深く品物をご覧の上、話をお聞きいただけただけではないかと思えます。